

## 「身寄りなし」になる自覚 ②

ここ最近、新聞紙面等を賑わすことが多くなったのが、「身寄りなし高齢者」というタイトルです。しかし「身寄りなし」と「高齢者」のどちらについても、この問題の本質を捉えていないと思います。

埼玉県在住の川口緑さん（83）は、戦災孤児として苦労した後、老舗和菓子店に嫁ぎ、3代目当主である夫に15年前に先立たれました。しかしその後は、ひとり息子の浩一さん（58）が4代目当主として和菓子店を切り盛りし、息子の店の手助けをしながら過ごしていました。少なくとも緑さんと浩一さんには、「身寄がない」「独居高齢者」という自覚や心配はまったくありませんでした。



心配事と言えば、浩一さんが独身で、後継ぎがないこと。地元でも愛され続けている評判の和菓子店ですので、これから弟子を取って後継者を見つけていこうかと親子で話していた矢先のことでした。

浩一さんが突然の脳梗塞により、倒れてしまいました。その後は、意識は戻りましたがまったく意思疎通ができず、身体を動かすことも出来ないため、入院を続けなければならない状況となってしまいました。

緑さんは、何からどうしたらよいのか分からず、途方に暮れてしまいました。浩一さんのこれからのこと、和菓子店の経営のこと、自分自身の生活のこと。緑さんには明らかな認知症の症状はありませんでしたが、年齢相応の理解力の低下が見られますし、すべて浩一さんに任せていた和菓子の仕入れや製造、経理のことなど、分かるはずはありません。

数か月後、緑さんは自宅で転倒して動けなくなったところを、数日後に訪ねてきた近所の人に瀕死の状態で見つかりました。一命は取り留めましたが、浩一さんと同様、意思疎通は難しい状況です。

こうして緑さんと浩一さん親子は、それぞれが「世話を頼れる身寄りのない」状況に陥ってしまったのです。いったい誰がどうやって、この親子のこれからの意思決定を行い、最終的にお墓に埋葬するところまでの支援を行うのでしょうか。

緑さんは数か月前までは、ご自身の老後とその先の死については、ひとり息子の浩一さんに任せておけば大丈夫と安心しきっていたことでしょう。浩一さんももちろん、母親を看取って、それから自分自身の終活を考えれば良いと思い描いていたかもしれません。

親子でお互いに面倒を見合う愛情があったとしても、さまざまな事情により家族に期待されている役割を果たせなくなることが、近年目に見えて増えてきています。親子だけではなく、子供のいない夫婦や独身同士で暮らしている兄弟姉妹でも、同様のことが起こり得ます。いま「身寄りなし」でも「高齢者」でもなくても、起こる可能性があるのです。

「身寄りなし」という言葉の持つ印象だけに捉われることなく、誰もが「身寄りなし」の状況となる可能性があるという自覚を持って、これからの人生をシミュレーションし、でき得る備えをしておくことが何よりも大切です。

つづく